

真庭では、森林が土地面積の約80パーセントを占めており、林業・製材業が基幹産業になっている。19世紀後半には、スギ、ヒノキ、マツなど、商用の材木となる樹種を植える取り組みが開始された。そして、1930年代後期までには、真庭は日本の中心エリアに向けた材木の主要な供給拠点になった。

この木材の多くは、建設に用いられている。日本建築では、伝統様式、現代様式のいずれにおいても、ミニマリズムに基づく設計を行い、材料には軽量のものを用い、屋内外を隔てる外壁は多孔質のものとする傾向がある。そのため、日本建築において、木材は常に重要な要素とされてきた。木材は、視覚に訴えるだけでなく、柔軟性に富み、軽量ながら引張強度に優れ、電気抵抗性や耐熱性が備わっている。

1970年代、低価格の輸入木材や消費者の嗜好の変化に伴い、日本の林業は衰退し始めた。真庭では、地元の産業を守るため、得られた材木を、効率的で環境に配慮した新しい方法で活用する道を模索し始めた。その例として、クロス・ラミネイティド・ティンバー（CLT）の積極的な活用が挙げられる。この建物は、1990年代中頃にヨーロッパで開発されたCLTの魅力や汎用性を伝えるために設計されたものである。

CLTの生産工程では、複数のひき板を直交するように積み重ねて接着することで、大きな木製パネルを作り出す。CLTで得られた材料は、標準的な木製パネル材と比べ、高い安定性、耐火性、断熱性を示すが、木の自然な色合いや木目も残している。CLTは再生可能な資源から作られるため、コンクリートに代わる、環境に優しい材料となっている。